



## 『親鸞聖人七百五十回大遠忌についての消息』をいただいて (三)

普賢晃壽 (ふげん こうじゅ)

ご消息をいただきますと、お念仏申し、心豊かに人生を歩むべきことをご教示されています。

お念仏の人生とは、阿弥陀如来の智慧と慈悲とに照らされ包まれ、いのちあるものが敬い合い支え合って、往生浄土の道を歩むことであります。

としるされています。

前号で記しましたように、阿弥陀如来は智慧・慈悲円満のおさとのり結晶である南無阿弥陀仏の名号でもって、私達凡夫を済度したもうのであります。

その名号のおいわれを疑いなく信受したのが信心であります。大智大悲の仏心以外に衆生の信心はありません。『信文類』をいただきますと、

信楽といふは、すなはちこれ如来の満足大悲円融無碍の信心海なり。

(『註釈版聖典』〈第二版〉二三四頁)

とご教示されています。「満足大悲」とは如来の慈悲の徳であり、「円融無碍」とは智慧の徳をいうのであり、「信心海」とは智慧と慈悲とを満足成就して、衆生を必ず救わずにはおかない真実の仏心を海にたとえられているのであります。

信心は仏廻向の名号によりめぐまれた仏心そのものであると、聖人はご教示されているのであります。そしてこの信心が衆生の口に流出したのが称名念仏であります。

してみれば、念々の称名に仏の大智大悲の真実がめぐまれているといえましょう。

念仏申す人生とは、この仏の智慧と慈悲に照らされ、はぐくまれ、生かされていく日暮らしであります。仏心をいただき念仏申す日暮らしは、煩惱の渦の中に埋没している私が、我執煩惱のこの身のままで如来に救われていくことが知らしめられ、念仏申す日々の歩みは、お浄土に導かれてあることが信知せしめられていく世界であります。このことを聖人は、「信心の智慧」と讃仰されています。

『正像末和讃』に、

智慧の念仏うることは

法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば

いかでか涅槃をさとらまし

(『同』〈第二版〉六〇六頁)

とご教示されています。虚妄分別の自己中心の煩惱の日暮らしより脱し得ない現実が知らしめられ、真実の如来

の浄土にまなこ開かせていただくのは、如来よりめぐまれた信心の智慧の恩恵であります。

このようなお念仏の信心の内容について、具体的に教示されているのが、機法二種の深信であります。ひとつの信心の信相の内実を機の深信と法の深信の二面より開示するものであります。

機の深信とは、我が身は罪悪生死の凡夫であり、迷いの生死の世界を超えていく出離の縁が全く絶たれた存在であると信知せしめられることであり、法の深信とは阿弥陀如来の本願力は、出離の縁なき衆生を済度したもうと信知せしめられ、如来の大悲に全托することです。

信心念仏申す真宗者の人生の歩みは、めぐまれた如来の大智大悲に照らされ包まれ、我が身の赤裸々な人間性の現実が知らされ、お浄土へのまなこを開いて頂く世界であるといえましょう。



このような如来大悲にはぐくまれる念仏者の日暮らしは、我を生かしたもう阿弥陀如来への感謝の宗教生活となって展開するのであり、このことを正定聚の聚人にめぐまれる現生十益の中、知恩報徳の益として、聖人はご教示されています。

知恩とは、私が念仏申す身になったのは、すべて如来大悲の恩恵に他ならないことを信知することであり、報徳とはその恩恵に報いることです。この如来への感謝の心は、おのずと自分を生かすあらゆるものに広がっていくのであり、感謝の日暮らしは、念仏者の宗教生活の根幹をなすものといえましょう。

そして、この知恩報徳の心で生きる念仏者の実践が、現生十益の中で讃げられている常行大悲の益であります。

常に如来の大悲を伝える念仏者の宗教生活の展開があるといえましょう。我も人も共に生かしたもう如来の大悲を、有縁の人々に伝え広める宗教的实践の歩みがめぐまれているのであります。共に如来の大悲の中に生かされてあるという喜び、感謝の心は、おのずから、生きとし生きるものすべて、わがはらからとしての思いが芽生え、あらゆる人々が敬い合い、支え合う社会の実現への歩みが展開されるといえましょう。『往生論註』に、

同一に念仏して別の道なきがゆるなり。遠く通ずるにそれ四海のうちみな兄弟たり。

(『同七祖編』 一二〇頁)

と教示されています。み親(仏)の大悲にいだかれ、同一に念仏申し、阿弥陀如来のいますお浄土への道を歩ませて頂く私達は、兄弟、はらからであります。ここに、民族・国境を越えて生きる念仏者の宗教生活の展開があるといえましょう。

しかしながら反面、如来の大悲に反照されている我が身の姿を見つめたならば、それは我執煩惱の愛憎の中に埋没して生きている凡夫の現実であります。聖人は『正像末和讃』におさめられている「愚禿悲歎述懐」において、

浄土真宗に帰すれども

真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて

清浄の心もさらになし

(『同』〈第二版〉六一七頁)

と悲歎されているのであります。

しかし、如来の大悲は、小慈小悲の有情利益すらなし得ず、悲泣せざるを得ない凡夫にこそめぐまれてあると、

聖人はいただいでいかれたのであります。

小慈しょうじしょうひ小悲もなき身にて

有情利益うじょうりやくはおもふまじ

如来がんにせんの願船いまさずは

苦海くかいをいかでかわたるべき

(『同』〈第二版〉六一七頁)

と讃じられています。自他共に、つつみたもう如来の大悲に生かされる喜びに生きる場所、お互いの苦しみ悩みを共有していきる念仏者の日暮らしの展開が存するのであります。そこにめぐまれてある世界こそが、いのちあるものが敬い合い支え合って生きていく、往生浄土の無碍の一道であるといえましょう。

(勸学寮頭)